
辻内家の猫

辻内英祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辻内家の猫

【Nコード】

N4056A

【作者名】

辻内英祐

【あらすじ】

兄が拾ってきた猫はコールタールに塗れて、弱った子猫でした。

—

手袋、マフラー、コート…自転車で帰宅する完全防備の高校生。冷たい風に顔をしかめながらも、ぐんぐんスピードを上げていきます。

「とに角、早く家に帰りたい。」

コルタールに塗れ、ガリガリに痩せた子猫を兄が拾ってきたのは、そんな寒い冬の日のことでした。

学校からの帰り道、車道をヨロヨロと歩く子猫を見つけた兄は、可哀相に思っ、拾ったのだといいます。

部活で使うタオルで子猫を包み、自転車の前カゴに乗せて帰宅した兄は、炬燵でぬくぬく、テレビを見ていた僕を呼び出して、その子猫を洗うように言い付けると、僕と交代で、炬燵でぬくぬく、テレビに熱中し始めました。

僕の兄は、とても優しい男なのですが、反面、非常に無責任な所がありました。いくら文句を言っても、一向に聞き入れない事は、目に見えていたので、仕方なく、その猫をタオルに包んだまま風呂場まで運んでいきました。

洗う前に、何か食べさせてやろうと思い、水で薄めたミルクと魚の缶詰を紙皿に入れて子猫の前に置くと、物凄い勢いでミルクを、ちやぶちやぶ、舐めはじめたので、一先ず安心しました。

兄が、猫を拾ってきたことは、この日が初めてではありませんでした。

弱った猫を見つけるとすぐにつれて帰ってくるので、その度に僕が猫の面倒を見ていました。

ミルクも缶詰も平らげた子猫は、泣き声も目も、しっかりとしてきたので、もう大丈夫だろうと思い、シャワーの湯加減に注意しながら、シャンプーでゴシゴシと洗ってやりました。

いくら洗っても毛にこびり付いたコールドタールは取れず、諦めて、シャワーを嫌がる子猫をタオルでふいてやって、浴室の扉を開けると、物凄い勢いで、浴室から逃げ出したので、もうすっかり元気になったなあと思いました。

逃げた子猫を捕まえて、ガスヒーターの前で半乾きの毛を完全に乾かすと、こびり付いたコールドタールを少しずつ、慎重に、ハサミで切り取ってやりました。

その作業は深夜まで続き、所々、こびり付いたコールドタールが残っているものの、努力の甲斐あって、最初より、数段キレイになりま

した。

そうして数週間たつと、汚れた毛が生え変わり、コートアルもすっかり取れて、あの弱弱いガリガリの子猫の面影は、完全に無くなっていました。

二

椅子の上でだらしく眠っている猫は、とても太っています。

暫らく、家で面倒を見ていると、大分元気になったので、野良に戻してやろうと、庭に放したら、勢い良く田んぼ道を走っていったので、やっぱり野性が一番なのだなあと思っただけで、猫の後ろ姿を見送ったのですが、その夜、外で”にゃーにゃー”と猫の泣き声がするので、窓を開けると、あの猫が窓から、スルツ、と家の中へ入ってきました。

どうしても夜になると家に帰ってくるので、野良に戻すのは諦めて、その猫は辻内家で正式に面倒を見ることになりました。

辻内家で甘やかされて育てられた猫は太りました。その太った猫を、父と祖母は”ミーちゃん”と呼び、母は”ミーコ”と呼び、兄は”プーさん”と呼び、俺は単に”猫”と呼んでいました。

どの名前を呼ばれても、特に反応を示すことはなく、ゴロゴロと、椅子の上で、いびきをかいて、眠っていました。

頭を触つても、お腹をくすぐっても、気怠そうに半目を開けて、また閉じるといった反応しか示さず、まったく、鈍感で倦怠な猫だなあと思いました。

ある日、僕が玄関の扉を開けた時に、猫が外へ飛び出していきました。

田んぼ道をぐんぐん走っていく猫の後ろ姿を見送って、また、夜になれば帰ってくるだろうと思っていたのですが、その日の夜も、次の日の夜も…そして、とうとう、その猫は家に帰ってはきませんでした。

三

梅雨入りして、ジメジメとした毎日が続き、洗濯物はまったく乾きません。仕方がないからカットシャツや体操服など、明日必要なものだけを取り入れて、ガスヒーターで乾かしていると、ふと、あの猫の事を思い出したのです。

猫は死期を悟ると、飼い主の前から姿を消すといった迷信を聞いたことがあります。僕は、何となくですが、あの猫は、まだどこかでたくましく生きているような気がするのです。

体操服をガスヒーターで乾かしていると、兄が帰ってきて、おい、と僕を呼びました。

「この猫、汚れてるからキレイに洗ってやって。」

生乾きの体操服とカッターシャツを椅子の背もたれに掛けると、僕はタオルに包まれた猫を優しく風呂場まで運んでいきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4056a/>

辻内家の猫

2010年12月18日20時22分発行